

古都千年の姉妹

辻 憲男（文学部教授）

かつて東山魁夷の「冬の花」の寂しさに魅せられたことがある。まっすぐに伸びた幹と緑の濃淡が、森の魔性のように思われた。

千重子が苗子（なえこ）の涙をふくと、苗子は千重子の胸に顔をおしつけて、かえって、よけいにしゃくりあげた。「困るやないの。苗子さん。さびしいの。やめて」。…二人はしばらく、だまって歩いた。「北山杉は、じつにこずえの方まで、枝打ちしてあって、千重子には、木末に少し、まるく残した葉が、青い地味な冬の花と見えた」。川端康成の『古都』の終章、苗子が秀男に結婚を申し込まれた、と千重子に打ち明ける。しかし秀男は苗子に千重子の「幻」を求めているのだった。双子の姉妹の愛が交錯する。

京の春は平安神宮の桜に始まる。「あたしが幸福…？」と、千重子はまた言った。目に憂愁のかけが、ふと浮かんだ。うつ向いたので、ただ、池の水が目につつたようでもあった。しかし、千重子は立ちあがった。「橋の向うに、うちの好きな桜があります」。「ここからも見える、あれね」。その紅しだれは、もっともみごとであった。名木としても知られている。枝はしだれ柳のように垂れて、そしてひろがっている。その下に行くと、あるなしのそよ風に、花は千重子の足もとや肩にも散った。

実の父母を知らず、呉服問屋の夫婦に拾われた「お嬢さん」千重子。祇園祭の宵山にめぐり逢った、瓜二つの妹・苗子。古風なつくりの“観光小説”ながら、根底には作家自身の孤児意識と、竹取物語・源氏物語以来の悲しく美しい文学伝統があった。



北山の中川。新聞連載時の挿絵は小磯良平。
良平、魁夷（かいい）ともに青春の地は神戸。